

# 図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2024.  
October  
No.197



## 世界の図書館

1 制作の周辺(4) —東京藝術大学卒業・修了作品展—  
図書館長 黒木 重雄

2 研究ノートから  
「やる気」の心理学  
人間科学部 心理学科 教授 松尾 剛

### ブラウジングルーム

映画で旅するイスラーム  
国際文化学部 国際文化学科 准教授 押尾 高志

3-4 世界の図書館  
ケント図書館  
外国語学部 外国語学科 教授 藤野 功一  
南カリフォルニア大学図書館  
外国語学部 外国語学科 教授 清宮 徹

5-6 図書館イチ押しのコナー  
図書館情報課 篠崎 結衣

7 蔵書ギャラリー no.37  
『民國時期新聞史料』  
国際文化学部 国際文化学科  
准教授 梅村 卓

# 制作の周辺(4)

—東京藝術大学卒業・修了作品展—

図書館長 黒木 重雄

「本日入学された皆さんはダイヤの原石。この中から一つか二つ、本物のダイヤモンドが出れば良い。残り的人たちはそれを磨くお手伝いをしなさい」元東京藝術大学学長 澄川喜一(彫刻家、1931～2023)の入学式での式辞の一節だそう。なんとも残酷なエールだが、これは澄川自身が藝大生だった時に、師 平櫛田中(彫刻家、東京藝術大学名誉教授、1872～1979)から告げられたものらしい。東京藝大は言わずと知れた超難関。美術学部ともなれば超が2つ3つは付く。入学するだけでも幾重にも濾された上澄みの一滴。その一滴になりたくて多浪も辞さず血の滲むような努力の末、やっとの思いでたどり着いた先でのこの一撃。確かに現実はその通りなので、先に誰かに言われようが後に自分で気付こうが同じ。結局は皆このサバイバルゲームに放り込まれる。そこでは常識や価値観がまずは転覆され、やがて深い懊悩煩悶の渦にのまれる。溺れそうになりながら、もがいてあがいて他とは違う自分を探す。そして這い上がる。いわば普通の人間から普通じゃない人間への脱皮。美術作家になるための必須の行程。そして、大学はその蛹を入れておく器。器の中の仲間が尖がっていれば尖っているほど脱皮は険しくなる。東京藝大はその尖がり具合が凄まじいだろうと憶測する。怖いが羨ましい。白状する。我が母校は美大の仲間にも入れてもらえない。が、それでも皆それなりに尖がっていた。尖がっているのが当たり前。そこからさらに尖がらなければ“他とは違う”にはなれない。そんな世界。

さて、極上のゆりかごで数年間を過ごした藝大生の展示会を上野で見てきた。第72回東京藝術大学卒業・修了作品展。美術学部卒業生と大学院美術研究科修士課程修了生を合わせた総勢420人による大展示会。会場も東京藝術大学構内の各建物、東京藝術大学美術館、東京都美術館と大がかり。マップ片手に歩くだけでも一苦勞。二日かけてとりあえず全てを見て回ることにした。が、やはり気になるのは油画。油画すなわち油彩画コースのこと。卒業生、修了生ともに約50名ずつ。卒業作品は東京都美術館、修了作品は東京藝術大学絵画棟で展示。一日目に卒業作品までは見終えたので、二日目は修了作品からスタート。まず目に飛び込んできたのは、スライムに覆われた人の顔。見覚えのあるモチーフ、人気作家だ。今やSNSで美術の情報もリアルタイムで大量に流れてくる。作家、美術関係者、愛好家など、数人をフォローしただけで我がスマホミュージアムは日々新作発表会で溢れかえっている。そんな中で幾度となく目にする作家は覚えてしまう。彼女はそんな一人。独特のモチーフと巧みな描写力からは貫禄さえも漂う。他にもアートシーンを賑わす者がちらほら。ただし、それは例外。大多数はもがきの只中だ。目の前のものをそっくり描くなんて朝飯前、構図や色彩を巧みに操って一端の絵画にすることだって容易い彼等が、本気で悩んでいる。“他とは違う”はどこにある？ その解を探しあぐねて捻り出した途中経過は、白いままのキャンバスだったり、

絵具の巨塊だったり。更には、平面を飛び出して、立体や映像やインスタレーションやパフォーマンスだったりもする。真っ当な“あがき”だと思う。なぜなら、油絵が発明されてから500年、数えきれないほどの絵描きが“他とは違う”を掘り当ててしまっているの、そこら中穴だらけ。これでは新天地を目指したくなるのも無理はない。高い山を築くためには、広くて頑丈な土台が必要。回り道や寄り道はもちろん、失敗や挫折だって土台の大切な材料になる。

そんなことを考えながら巡っていたら油画の修了作品の展示も終盤になった。東京藝術大学絵画棟の8階から下へ、順に個展形式で行われている展示を一部屋ずつ覗いて、ただいま5階、展示に使われているのはこの階まで。既に30部屋は見た。残すは10部屋。午前中だったこともあり、人はまばら。作品の傍らに作者(修士2年[当時]の川野裕有希さん)が座っていたので話しかけてみた。「同級生や下級生の中には売れていく人もいて葛藤があったのでは？」と向けると、軽く微笑みながら「まあ、そうですね」と答えてくれた。「これからは？」の問いには「他に何か就職が決まっているわけでもないのとおりあえず作家としてやっていきます」と、これまた軽く微笑みながら答えてくれた。彼が特別なわけではないだろう。



第72回東京藝術大学卒業・修了作品展における東京藝術大学絵画棟508室の展示の様子。作品は川野裕有希さんの「東京大展望」(キャンバス・アクリル絵具・324.0cm×454.6cm)。

何の保証も無く大学を後にする者も少なくないはず。加えて言えば、今、売れていても先の保証は無い。“自分を信じて作り続ける”美術作家への道はこれしかない。しかもこれが最短ルート。そしてゴールがあるとは限らない。セーフティーネットも張らずに突き進む姿は無謀にも映るが、彼らにとって、いわゆる就職は脱落なのだろう。サバイバルレースは始まったばかり。誰が本物のダイヤモンドなのか、その答えが分かるのは10年後か、20年後か、いや、ひょっとしたら50年後なのかもしれない。

そう言えば、澄川喜一の卒業式の式辞は「今、皆さんに卒業証書を渡しましたが、それでメシが食っていけるわけではありません」で始まったそう。これまた平櫛田中の「卒業証書はただの紙切れ」に由来するらしい。東京藝大では肝の座った金言が語り継がれている。

## 「やる気」の心理学

人間科学部 心理学科 教授 松尾 剛

「どうすれば課題に対するやる気が出るのだろうか?」「授業に対するやる気が高い人と低い人の違いって何だろう?」「授業によってやる気が変わるのはなぜだろう?」などなど、みなさんも大学生活の中で「やる気」(心理学では「動機づけ」という言葉を使います)について考える機会が多いと思います。これらは、私が専門としている教育心理学の領域で長年にわたって研究されている問いでもあります。以下では、鹿毛(2012)から、動機づけに関する代表的な理論の一つである有機的統合理論をご紹介します。

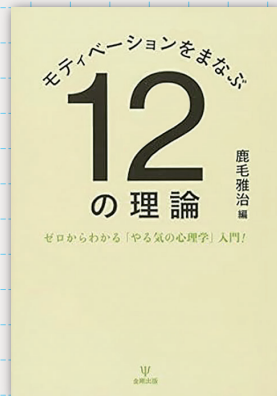
有機的統合理論では、報酬や罰によって他者から「やらされている」と感じている行動に対する動機づけは低くなるのに対して、自分にとって重要なことだ、やる意味があることだ、と価値を実感して「自分の意志でやっている」と感じている行動に対する動機づけは高くなると考えます。8月にオープンキャンパスがありました。心理学科では学生が主体となって、高校生に心理学を紹介するイベントを実施しました。「受験勉強は大変だし、好きではないけど、西南学院大学で心理学を学びたい。そのために受験勉強が必要だから頑張ろう!!」といった感じで、参加してくれた方の動機づけが少しでも高まるといいなあ…

と考えながらイベントの様子を眺めていました。

その他にも、学習に対する目標設定、教師の言葉かけ、学級の生徒同士の関係、教材や評価方法など、教室の様々な環境が動機づけに与える影響について、数多くの研究がなされています。例えば、子どもにフィードバックを与える際には、人に言及する(「あなたにはがっかりした」「あなたはすばらしい」など)よりも、プロセスに言及する(「ここがうまくできていないね」「このやり方は良かったね」など)方が、その後の課題への動機づけを高めることができるといった知見(Kamins & Dweck, 1999)などもあります。どこに、どんな、やる気を高めるしかけがあるのだろう、と考えながら授業を受けてみると、面白い発見があるかもしれませんね。さて、ここまでの説明を読んで、「もっと詳しく知りたい!!」と動機づけが高まった方(いたら嬉しいです)は、ぜひ、図書館へ行って学んでくださいな。

<参考文献>

鹿毛雅治編『モチベーションをまなぶ12の理論:ゼロからわかる「やる気」の心理学入門!』金剛出版、2012年[4階B:通常書架 141/72/18]  
Kamins, M. L., & Dweck, C. S. (1999). Person versus process praise and criticism: implications for contingent self-worth and coping. *Developmental psychology*, 35, 835.



モチベーションをまなぶ12の理論  
ゼロからわかる「やる気」の心理学入門!

## ブラウジングルーム

### 映画で旅するイスラーム

国際文化学部 国際文化学科 准教授 押尾 高志

イスラームやイスラーム教徒(ムスリム)という言葉を知って、日本に暮らす私たちは何を思い浮かべるだろうか。中東発の宗教で、1日5回の礼拝をする、断食をする、豚肉や飲酒が禁止されている、女性がヴェールを被る、といった一般的情報だろうか。あるいは、報道される現在の中東・パレスチナ情勢を念頭に、「戦争」や「難民」、「テロリズム/テロリスト」といったネガティブなイメージを連想するだろうか。それは、イスラームやムスリムが身近ではない(と感じている)からかもしれないが、一方でアメリカ人に対して、同じようにネガティブなイメージを持つことは少ない。なぜなら、私たちが映画やドラマ、報道などのメディアで目にするアメリカ人は、テロリストでも難民でもなく、映画俳優やアーティスト、政治家などだからである。そして、ムスリムが主人公の映画なんて見たことがないし、どんな作品があるかも知らない、という人がほとんどであろう。

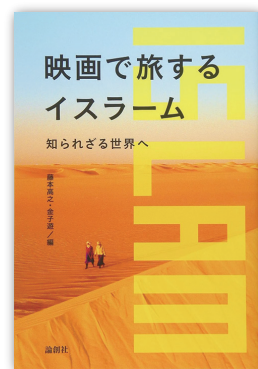
『映画で旅するイスラーム 知られざる世界へ』は、藤本高之氏が主宰する「イスラーム映画祭」の公式ガイドブックで、同映画祭の上映作品を含む70本の映画を紹介している。「イスラーム映画祭」はイスラーム地域を舞台とし、そこに暮らす人々を描いたりした作品を上映する映画祭で、2015年から現在まで年1回、東京・名古屋・神戸の映画館で開催されている。『映画で旅するイスラーム』のなかでは、中東アラブ諸国、アフリカ、ヨーロッパ、中央アジア、南アジア、中国・東南アジアなどの地域別に、イスラームという緩やかなテーマで繋がった作品が列挙されているが、各映画が扱うテーマは、宗教観、文化、結婚、ジェンダー、スポーツ、戦争、音楽、歴史と多種多様で、私たちとよく似た一般市民の生活や社会を描く作品が多い。また、作品紹介に加えて、識者によるコラムでは、パレスチナ問題や

アラブ音楽、婚姻制度、アラビア文字、ファッションなど、作品を横断するテーマが説明されているので、映画を見る際の手がかりにもなる。

本書で紹介された作品をWeb検索すると、ソフト化されている作品が少ないことに気がつくだろうが、諦めてはいけな。今はWebで動画配信されていることも多いので、邦題だけでなく原題で検索すると良いだろう。これらの作品には、日本語字幕はなくとも英語字幕がついていることが多いので、英語字幕で外国映画を見ることにチャレンジしてみてもいい。英語は、非英語圏の文化や人を知るためにこそ有用なツールなのだ。

冒頭で、イスラームは身近ではないと書いたが、実のところ世界最大のムスリム人口を抱える国はインドネシアで(全人口の87%がムスリム)、日本に暮らすインドネシア人は約14万9千人、これは在日アメリカ人の倍以上である。つまり、数だけ見れば、私たちのより身近には、アメリカ人ではなく、ムスリムのインドネシア人が暮らしている。そう聞くと、俄然インドネシア映画を見たくなってきたのではないだろうか?

藤本高之・金子遊編『映画で旅するイスラーム 知られざる世界へ』論創社、2018年、[6階B:通常書架 778/228/1]



『映画で旅するイスラーム  
知られざる世界へ』

# 世界の図書館

[ アメリカ編 ]



[写真1] ケント図書館 外観

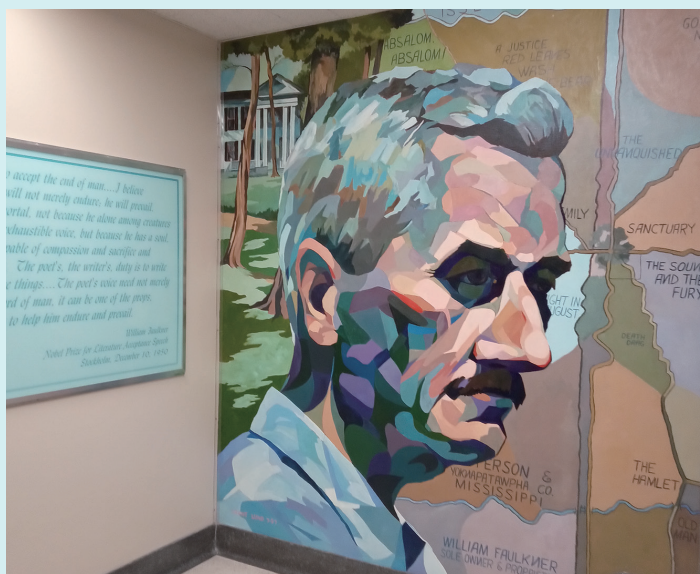
セント図書館 (サウスイースト・ミズーリ州立大学)

1 University Plaza, Cape Girardeau, MO 63701, USA アメリカ  
<https://library.semo.edu/>

外国語学部 外国語学科 教授 藤野 功一

1 年間の在外研究中、ウィリアム・フォークナーの文学作品を研究する客員研究員として滞在させていただいているサウスイースト・ミズーリ州立大学には、長年この図書館の司書を務められたサディ・ケント氏にちなんで名付けられたケント図書館があります。エマソン、マーク・トウェイン、ホイットマンといった、著名な作家たちの名前を刻印した印象的な外観の図書館に入っていくと、その中央部分には2階と3階をつなげて吹き抜けにした空間に「フォークナー研究所」とその事務室があり、さらにその横に配された貴重書室には、ノーベル賞作家であるウィリアム・フォークナーに関するアメリカ最大級のコレクションが収蔵されています。

このサウスイースト・ミズーリ州立大学のウィリアム・フォークナー関連の所蔵は、ミシシッピ大学、ヴァージニア大学、テキサス大学と並ぶアメリカの4大フォークナー・コレクションの一つとされ、その内容には、フォークナーの2,000ページを超える原稿、3,000通以上の手紙、約2,000枚の写真、フォークナーのハリウッドでの仕事に関する1,000ページ以上の資料、フォークナーや彼の妻のエステルによって描かれた絵画のコレクション、さらにはフォークナーの作品に捧げられた評論の膨大なコレクションが含まれています。この大学のフォークナー研究所に研究室を一つ与えてもらい、希望すればそれらを自由に閲覧することができる環境の中でリサーチを進めさせてもらっているのは、



[写真2] 図書館内の壁に描かれたフォークナーの肖像画

なんとも贅沢なことだと思います。もともと、1960年代からフォークナーの初版本を収集し始めたルイス・ダニエル・ブロードスキー氏によって築かれたコレクションを、サウスイースト・ミズーリ州立大学に在職されていたロバート・ハムリン博士がブロードスキー氏と共に協力してケント図書館に収蔵することにしたのが始まりであるため、この大学のフォークナー・コレクションは、通称「ブロードスキー・コレクション」と呼ばれています。創始者のハムリン博士は現在でも名誉教授として大学のフォークナー研究所の運営に関わっており、研究室で時々お会いしてはフォークナー関連の資料についての様々な来歴を聞いたり、また、他の研究者の方々とともに貴重書室でフォークナー関連の貴重書についての説明を聞かせていただいたりしています。もし、この図書館のフォークナー関連の貴重書についてご興味があれば、貴重書室でのハムリン博士自身によるブロードスキー・コレクションの説明をビデオ撮影し、YouTubeにアップロードしましたので、ご覧ください。説明の導入部分を20分程度のイントロダクションとして公開しています。(https://www.youtube.com/watch?v=cibH-GIsKAE) 英語での説明ですが、とてもわかりやすい内容となっています。ハムリン博士の気さくな人柄とともに、サウスイースト・ミズーリ州立大学の貴重書室の魅力に触れてみてください。 ハムリン博士のYouTubeはこちら▶

なんと

もともと、1960年代からフォークナーの初版本を収集し始めたルイス・ダニエル・ブロードスキー氏によって築かれたコレクションを、サウスイースト・ミズーリ州立大学に在職されていたロバート・ハムリン博士がブロードスキー氏と共に協力してケント図書館に収蔵することにしたのが始まりであるため、この大学のフォークナー・

コレクションは、通称「ブロードスキー・コレクション」と呼ばれています。創始者のハムリン博士は現在でも名誉教授として大学のフォークナー研究所の運営に関わっており、研究室で時々お会いしてはフォークナー関連の資料についての様々な来歴を聞いたり、また、他の研究者の方々とともに貴重書室でフォークナー関連の貴重書についての説明を聞かせていただいたりしています。

もし、この図書館のフォークナー関連の貴重書について

のご興味があれば、貴重書室でのハムリン博士自身によるブロードスキー・コレクションの説明をビデオ撮影し、YouTubeにアップロードしましたので、ご覧ください。説明の導入部分を20分程度のイントロダクションとして公開しています。

(https://www.youtube.com/watch?v=cibH-GIsKAE) 英語での説明ですが、とてもわかりやすい内容となっています。ハムリン博士の気さくな人柄とともに、サウスイースト・ミズーリ州立大学の貴重書室の魅力に触れてみてください。 ハムリン博士のYouTubeはこちら▶





【写真1 南カリフォルニア大学図書館外観】



## 南カリフォルニア大学図書館

University of Southern California 3550 Trousdale Parkway Los Angeles, CA 90089  
<https://libraries.usc.edu/libraries-overview>

アメリカ

外国語学部 外国語学科 教授 清宮 徹

2024年の春から半年の在外研究を、ロサンゼルス(LA)で過ごした。LAと言えばアメリカで最も大きな街のひとつであり、誰もが知っている馴染みの街である。近年はLAドジャースの大谷翔平選手の活躍もあり、多くの日本人が訪れる街でもある。そのLAには2つの大きな大学があり、1校はUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)で、もう1校はUSC(南カリフォルニア大学)である。この2校は学術的にも、スポーツや芸術の面でもライバル関係にある。私はUSCに在籍した。この大学は学生数4万人を超える大きな私立の総合大学であり、その半数以上は大学院生という研究重視の大学である。アメリカンフットボール全米優勝10

回を誇る強豪チームを有し、スポーツ全般に優れた選手を輩出している。また映画の街であるLAらしく、ジョージ・ルーカスや、ロバート・ゼメキス、ロン・ハワードなど、ハリウッド映画の名監督が学んだ大学でもある。キャンパスはLAのダウンタウンに近く、大学周辺は治安が良いとは言えないのだが、キャンパス内は庭園がきれいに整備され安全で大変美しい。そのキャンパスの中央にメイン図書館の「ドヘニー記念図書館(Doheny Memorial Library)」がある。2024年春、全米の大学はイスラエルのパレスチナへの攻撃に抗議するデモ活動のため、大混乱に陥ったのだが、その発端がUSCであったこともあり、この図書館の前も学生たちで覆いつくされていた。しかし、普段はとても静かな環境の良い場所だ。USCはメインライブラリーの内外に22の図書館と情報センターを持って



【写真2 図書館1階受付】

おり、実際にはメイン図書館よりも、この22に分かれた各研究領域に基づいた図書館の方が、学生にとってはより身近で機能的な場所になっている。全体としては約600万冊の蔵書と170万の電子図書を所有し、約270名の職員が働く大きな図書館だ。

メイン図書館は歴史を感じる外観の4階建てビルだが、1階下



【写真3 学習スペース】

には2層のフロアがある。正面の大きな門を入ると天井が高く重厚感のあるエントランスがあり、両側の壁に施された美しい

ステンドグラスから柔らかな光を取り入れている。床は市松模様のタイルで敷き詰められ、落ち着いたイメージだ。一般に最上階を除き利用可能で、学生が集中して勉強できるスペースが随所に解放されている。また学生の多くは本よりもパソコンを開いていることが多く、電子図書の普及拡大が進んでいることがわかる。私自身も図書館で本を開くよりもパソコンで電子ジャーナルを調べ、電子化された論文や図書を読むことの方が多い。

メイン図書館には、2つの特徴があった。1つは「東アジア図書館」であり、ここには日本画などの美術品が展示されていて、LAとアジアのつながりの深さを示すものとなっている。もう1つの特徴は、映画とのかかわりの深さを示す「映画芸術図書館」である。映画スターの書簡やポスターなど、映画好きがワクワクする様々な展示がフロアに広がっていた。大学の図書館でこのような展示に出会うことは珍しく、大学の個性がさりげなく表れる場所である。LAを代表する総合大学の図書館として、歴史的な威厳を持った存在となっていることが伺えた。

# イチ押しのコーナー

図書情報課 篠崎 結衣

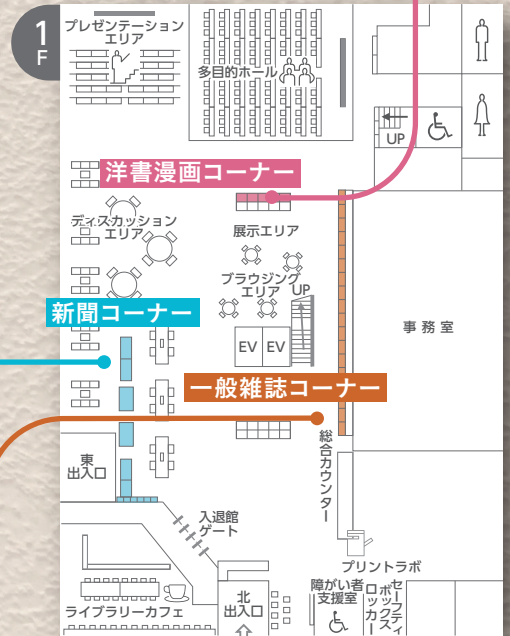
196号に続き、今回も図書館内の様々なコーナーについてご紹介します。各コーナーの場所は、フロアマップをご参照ください。

## 新聞コーナー

西日本新聞、読売新聞等の日本で発行されている新聞はもちろんのこと、The Financial times、中文導報等の海外の新聞、科学新聞や図書新聞等の特定の分野に特化した新聞など、様々なジャンルの新聞を取り揃えています。社会情勢を知ることは、大学生の間だけではなく、社会人になってからも重要なことなので、ぜひいろんな新聞を読んでみてください。また、近くには政党機関誌も収集していますし、1階多目的ホール付近には日本の新聞(主要全国紙)の縮刷版もあります。



1F

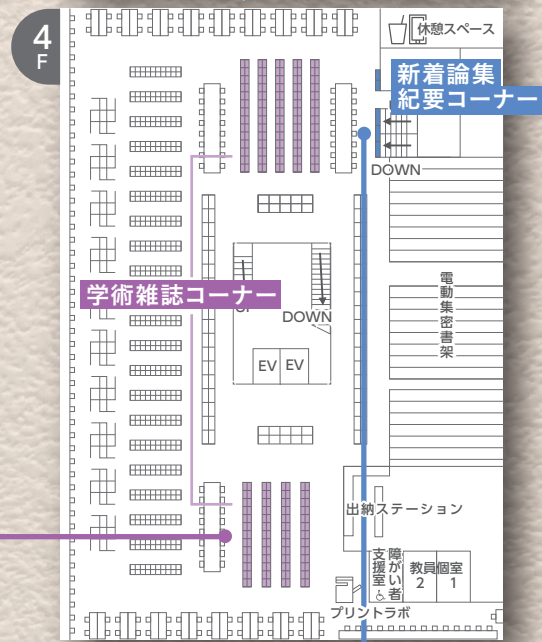


## 一般雑誌コーナー

一般雑誌を配置しているコーナーです。書店で販売しているようなファッション誌や音楽誌、旅行誌を取り揃えています。空き時間に、コーナーの近くのブラウジングエリアに座って、雑誌を読んでいる方をよく見かけます。



1F



## 学術雑誌コーナー

各学部の学修に必要な学術専門雑誌が並んでいるコーナーです。和洋で配架場所を分け、さらに分類・ジャンルごとに並んでいます。最新号は透明のブックホルダーに入っており、その奥にはバックナンバー1年分と製本雑誌\*が並んでいます。より古いバックナンバーを読むためには、OPACでの自動書庫出庫指示が必要です。

\*製本雑誌: 雑誌はある程度年数が経ったら、しっかりとした本の形に製本され、製本雑誌として図書館に所蔵します。



4F

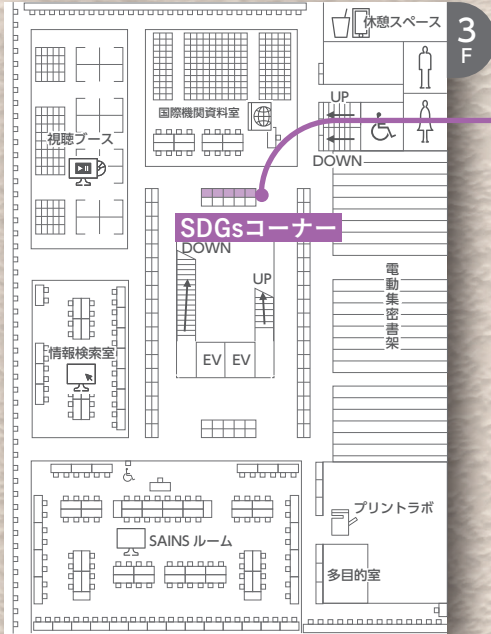
## 新着論集紀要コーナー

論集・紀要というのは、日本の大学や研究機関などが出している、教員や研究員の研究成果が掲載された定期行物です。図書館には、国内の様々な大学や研究機関から論集や紀要が届きますので、中でも新着のものをこのコーナーに集めています。もちろんそれ以前のものも所蔵しており、3階と4階の電動集密に配架しています。

1F

## 洋書漫画コーナー

このコーナーには、One Piece、Case closed(Detective Conan)、Black Jack等の人気作をはじめ、約40シリーズの洋書漫画を配架しています。留学生の方はもちろん、学部の学生が手に取って読んでいる場面をよく見かけます。「お気に入りのセリフが、英語ではどのような表現になるのか」そんな視点から、皆さんの英語学習が深まる手助けになればと思います。

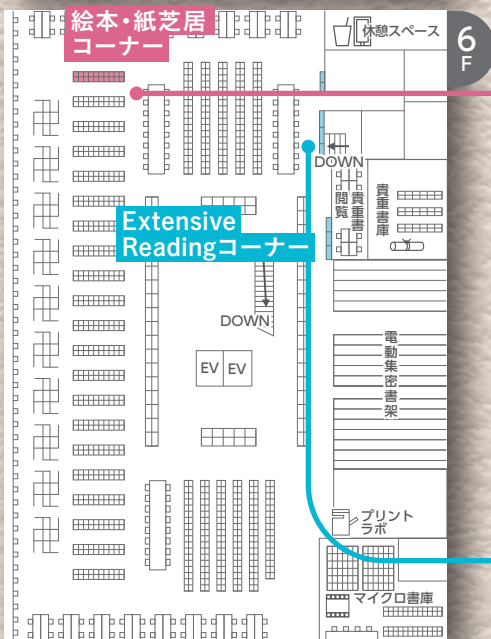


## SDGsコーナー

SDGsとは、国連が掲げている環境・開発・人権などに関する17の国際目標で、現在は2030年の目標達成に向けて、各目標に応じた様々な取り組みが世界全体で行われています。図書館では、SDGsに関する図書を集め、SDGsコーナーとしてまとめて配架しています。17の目標に応じて分けて配架していますので、ぜひ手に取って見てください。  
※SDGs(Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標)



3F



## 絵本・紙芝居コーナー

絵本や紙芝居を取り揃えているコーナーです。日本の絵本作家のものだけでなく、日本語で出版された海外の作家の絵本もあります。絵本も紙芝居も、児童教育学科の幼稚園や保育園、小学校へ実習に行く学生によく活用されているだけでなく、子育て中の教職員にも利用されています。



6F

## Extensive Readingコーナー

英語の多読学習のためのコーナーです。外国語学部の方は特に馴染みがあるのではないのでしょうか。資料はいくつかのシリーズがあり、レベル別にシールで色分けして配架しています。レベルが上がるにつれて、話の長さや内容の難しさが変化していきます。多読学習はリーディングをこなすことによって、語学力アップを目指す学習法ですが、何より楽しんで行うということが重要です。ぜひ興味のある資料を見つけて、読んでみてください。



6F

4F



## 『民國時期新聞史料』

【3階 E：ブックツリー-外回り】

『民國時期新聞史料』は、中華民国時期（1912～49）のメディア関係（中国語で「新聞」とはニュースや報道の意）の史料を収集した史料集である。本学では一連のシリーズである『民國時期新聞史料匯編（16冊）』、『續編（32冊）』、『三編（26冊）』、『四編（30冊）』を全て所蔵しており、全国的にも貴重なコレクションを有していると言えるだろう。

メディア研究や歴史学において、「メディア史」は比較的新しい研究領域である。研究で使用する「史料」として新聞や雑誌の記事を扱うことはあっても、メディアそれ自体が分析の対象とされることは少なかった。とりわけ中華民国時期の研究においては、ここ20年ほどで映画や雑誌などの一部で研究が進んだものの、ほとんど手つかずの分野ではないかと考える。その理由の一つには利用できる史料の不足があるが、本史料集は研究を大きく進展させる可能性を秘めていると言える。

『民國時期新聞史料』に収められているのは、当時の新聞学の研究書、報道関係者の業務指導書、全国の通信社一覧などのデータ資料、会議の議事録などから、貴重な雑誌そのものまで多岐にわたる。そのなかで筆者が最も貴重な史料だと考えるのは、『三編』に収められている『新検月報』である。おそらく現在では北京にある中国国家図書館で閲覧する以外に、この『民國時期新聞史料』の影印版を利用する他にアクセスする術はない。中国での史料閲覧が制限されている現在において、このような史料集が貴重な助けとなる。

『新検月報』は、中国国民政府（重慶政府）の検閲機関・戦時新聞検査局が1943年11月15日に創刊した検閲の実務担当者向けの雑誌である。検閲とは政府や国家が都合の悪い報道や出版物を取り締まることを指す。検閲は民主主義の根幹を支える報道の自由を制限するものであり、中国では現在でも共産党政権の下で検閲が広く行われていることはよく知られている。だが、日中戦争下の蒋介石政権（中華民国国民政府）においても、検閲が実施されていたことに留意する必要がある。『新検月報』は、このような中華民国から中華人民共和国への移行を考える上で、メディア検閲の実態を明らかにする重要な史料となるのである。

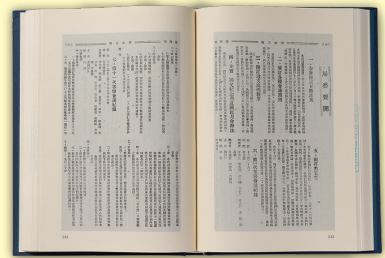
具体的に見てみよう。『新検月報』では、検閲にかかった記事のタイトルとその理由が具体的に挙げられており、これにより当時どのような記事が検閲されたのかを知ることができる。国民政府下の新聞では、政府に対する批判



【図1】民國時期新聞史料



【図2】『新検月報』創刊号表紙



【図3】『新検月報』の内容

はもちろんのこと、同盟国であるアメリカやイギリスにとって不都合なニュースも、それらの国に配慮して報道が禁じられていた。また水面下で対立していた中国共産党を利するようなニュースは、とりわけ厳しく禁じられていた。

一方アメリカは、対日戦争を有利に進めるため中国共産党の協力も得ようと考えており、その点で蒋介石政権と立場を異にしていた。西側メディアでも、戦争勝利のため中国共産党と協力し、連合政府を樹立するよう迫る記事が報道されていた。中国メディアは、当時海外のニュースを独自に取材することができなかつたため、アメリカ側が提供する国際ニュースを記事のソースとして利用していた。国民政府は、こうした海外メディア由来の政府批判や連合政府に関わる記事を取り締まっていたが、この点でアメリカの方針と対立していたことが分かるのである。

以上のように『新検月報』やそれを収録した『民國時期新聞史料』を利用することにより、国民政府のメディア政策の実態や、同盟国であった中・米が報道や検閲をめぐる対立していたことをうかがい知ることが出来る。本稿では『新検月報』という一つの史料に焦点を当てたに過ぎないが、『民國時期新聞史料』の活用によって新しい発見が生まれ、それにより中国メディア史の新たな可能性が開けるのではないかと考える。

## 編集後記

後期授業が開始して、早くも1か月が過ぎました。秋も深まり、図書館職員としては“読書の秋”を勧めたいところですが... 芸術の秋、スポーツの秋、食欲の秋など、他にも盛りだくさんの季節ですよ。ただ、せっかくの機会です。この秋、1冊だけでも本を読んでみませんか？ 何気なく出会った本が、あなたにハマる1冊になるかもしれません。図書館は、そんな出会いのチャンスがあふれる場所ですよ。ご来館、心よりお待ちしております。(T.S)

## 西南学院大学図書館報 No.197

2024年10月31日発行  
編集 図書館報編集委員会  
発行 西南学院大学図書館  
〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号  
Email lib-jm@seinan-gu.ac.jp  
<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/>  
図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。

